

集団の中で鍛えられた 浅利さんのルポ

建設一般・全日自劳教宣部
松沢 常夫



中途半端で「とにかく書いた」という段階にとどまっていた。しかし、出席率のあまりよくない例会であっても、これを重ね、飲み、年一回の機関紙をだしつつける作業を通じて信頼関係が深まり、もともと時代と切りむすぶものを描きたいという欲求が強まっていたのは事実でした。だから、柳沢さんの問題提起を

うけて大茂さんが三宅島ルポで突出したとき、みんなが喜び、自分の原稿のようにとりくんだし、編集会議はもう終わりというときに、浅利さんがおすおすと「レジメていのですが」と、まだみがかれていないけれど、涙なしに読めない事実がちりばめられている第一稿をだしたときは、締め切りをのばして、徹底的にいいものにしよう

今度は集団の力で

「自己満足でいいのか、身内だけにしか通用しないようなものでいいのか、多数の人の批判をくぐって社会に通用するものをめざすべきではないのか、そこに挑戦せずして、時代と人間をとくキイがつかめるのか」

この一年、顧問の一人、労働旬報社の柳沢社長から、私たちはこう問いつめられてきました。

締め切りをのばして



だしあったりできるんだなあ、そんな思いでいっぱいでした。浅利作品については、同じ事実を描くのも、しかも同じ人間を描くのも、事実のとらえ方で、こんなにも作品の質が変わってしまうのか、という驚きと感動を味わいました。私は途中で投げてしまいましたが、それはテーマがアイマイで十分しぼりきれなかったからです。なぜか。次には、今度こそ大茂、浅利作品を生みだしたルポ研集団の力を借りて、現代を切りとれるような作品を書いてみたいと思います」。